

厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）
分担研究報告書

正常中皮細胞株の樹立と新規分子標的薬の効果の検討

研究分担者 中西速夫 愛知県がんセンター研究所 腫瘍病理学部 室長

研究要旨：悪性中皮腫は悪性度が高く、しかも現在、有効な抗がん剤や分子標的薬が存在しないため、患者の予後は極めて不良である。中皮腫には3種類の主要な組織型（上皮型、2相型、肉腫型）が存在し、肉腫型ほど悪性度が高い。しかし、この組織多様性の背景に存在すると考えられる中皮細胞の分化や上皮間葉移行 (Epithelial-Mesenchymal Transition, EMT) などに関する制御メカニズムはほとんど明らかになっていない。昨年度、この点を明らかにするために初代培養中皮細胞に HPV-E6, E7 および hTERT 遺伝子を導入し、敷石状に増殖する上皮性の細胞株から繊維芽細胞様の形態を示す細胞株まで、すなわち、上皮型、2相型、肉腫型を mimic する不死化正常中皮細胞株パネルを独自に作成した。本年度はこれらの不死化中皮細胞株を用いて種々のサイトカイン刺激により中皮細胞の上皮間葉移行 (EMT) について検討した。その結果、中間型中皮細胞株 D-4 では TGF- β および IL1- β などのサイトカインの単独あるいは併用刺激により EMT を誘導可能であることが明らかとなった。D-4 細胞株の結合組織成長因子 (connective tissue growth factor, CTGF) 発現を siRNA でノックダウンしたところ、低密度培養下においても細胞間接着性が増強し、敷石状の上皮細胞様配列の促進が認められた。さらに、肉腫型中皮腫細胞株 A-4 では過剰発現している CTGF のノックダウンにより強い細胞増殖抑制と形態変化が認められた。これらの結果から正常の不死化中皮細胞では TGF- β , IL1- β などの複数の炎症性サイトカインの協調作用により EMT が誘導されること、またこの EMT 誘導には TGF- β /CTGF 経路が関与し、この経路をブロックすることにより正常中皮の EMT の抑制のみならず、中皮腫細胞の肉腫型への悪性進展を抑制できる可能性が明らかとなった。

A. 研究目的

1. 種々の分化形質を示す不死化正常中皮細胞株の樹立とその増殖、シグナル経路の *in vitro* 解析および YAP 強制発現株を用いた *in vivo* 解析
2. 不死化正常中皮細胞株を用いた中皮細胞の EMT 誘導とその分子機構の解析

B. 研究方法

1. 不死化正常中皮細胞株を用いた中皮細胞の EMT 誘導とその分子機構の解析
昨年度、樹立した不死化正常中皮細胞 HOMC-2 A-7 (B-1) 株 (上皮型、以下 B-1)、HOMC-2 A-7 (D-4) 株 (中間型、以下 D-4)、お

よび HMC-3 (A-4) (肉腫型、以下 A-4) を用いた。1-10 ng/ml のヒト TGF- β 、IL-1 β 、TNF- α およびそれらの併用により刺激後 24 時間後の EMT 誘導の有無を形態変化の観察および qRT-PCR 法により検討した。また siRNA を用いて CTGF 発現をノックダウンし、EMT が抑制されるか否かを同様に検討した。また同時に複数の上皮型および肉腫型の悪性中皮腫細胞株を用いて CTGF 発現のノックダウン実験を行った。

C. 研究結果

1. 不死化正常中皮細胞株を用いた中皮細胞の EMT 誘導とその分子機構の解析

上皮様形態を示す不死化正常中皮細胞株 B-1、および比較的、上皮様形態を保持する中間型細胞株 D-4 を用いて正常中皮細胞における上皮間葉移行 (EMT) 誘導の可能性とそのメカニズムについて検討した。B-1, D-4 細胞を TGF- β , IL-1 β , TNF α などのサイトカインで 24 時間 刺激したところ、TGF- β は単独投与でも軽度ながら形態変化が認められ、また E-cadherin 発現の低下および Snail の発現上昇傾向が認められた。さらに TGF- β と IL-1 β あるいは TGF- β と TNF α を併用投与したところ、特に前者の組み合わせで上皮様形態から紡錘型形態へと明らかな EMT 様変化が観察された。この変化は B-1 株よりも D-4 株でより顕著であった (図 1)。これに伴い EMT マーカー発現では、E-cadherin の顕著な発現低下および Snail および CTGF の有意な発現上昇が認められた (図 2)。一方、siRNA で中間型 D-4 細胞の CTGF 発現をノックダウンしたところ、細胞増殖の抑制はごく軽度であったが、低密度培養下においても細胞間接着性が増強した (図 3)。以上のことから上皮様の不死化正常中皮細胞は TGF- β , IL-1 β , TNF α などの複数のサイトカインの協調作用

により EMT が誘導されることが示唆された。

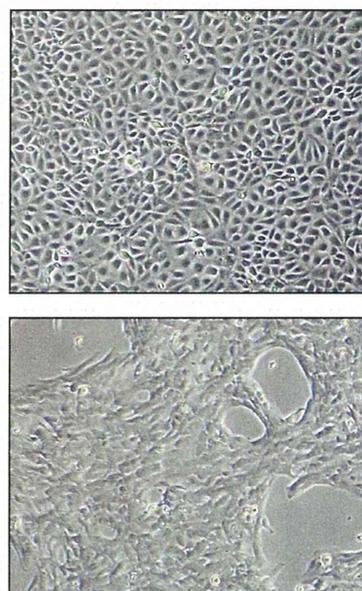


図 1 不死化中皮細胞 D-4 株における TGF-beta+IL-1beta による EMT 誘導。上皮～中間様形態 (上段) から繊維芽細胞様形態 (下段) に変化。

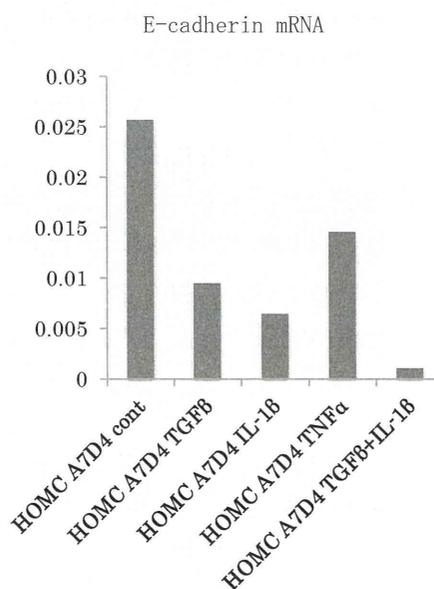


図 2 不死化中皮細胞株 D-4 株における TGF-beta+IL-1beta による EMT 誘導。E-cadherin の発現低下が誘導。

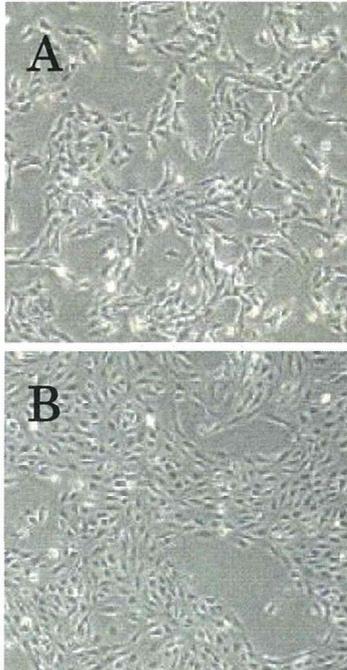


図3 不死化中皮細胞株 D-4 株の CTGF ノックダウンによる細胞間結合性の増強。A コントロール。B siRNA ノックダウン。

次に、複数の悪性中皮腫細胞株を形態から上皮型と肉腫型に分けて E-cadherin, Snail や CTGF 発現を調べたところ、細胞株によるばらつきはあるものの上皮型に比べ肉腫型細胞株において明らかな E-cadherin の発現低下と共に、Snail および CTGF の発現上昇が認められた。さらにこれら細胞株の CTGF 発現を siRNA でノックダウンしたところ、発現の高い肉腫型細胞株において形態変化および細胞増殖能の強い抑制が認められた (図4)。

D. 考察

今回、中皮腫の上皮型、2相型および肉腫型という組織学的多様性の鍵を握ると考えられる正常中皮細胞の EMT に焦点を定め

て解析を行った。その結果、中間型 D-4 細胞においてはサイトカイン TGF- β および IL1- β の刺激により明らかな上皮間葉移行 (EMT) を誘導できることを明らかにした。興味あることに上皮様性格の強い B-1 株では EMT 誘導は形態変化、マーカー発現のいずれの点からも D-4 株に比べて弱かった (data not shown)。D-4 株は TNF- α 単独投与でも EMT 誘導が見られたのに対し、B-1 株では明らかな形態変化は認められなかった。これらの結果は D-4 株では元々の E-cadherin 発現が低いため、TNF- α 刺激で E-cadherin 発現がほとんど消失するのに対し、B-1 株では元々の E-cadherin の発現レベルが高いため、TNF- α 刺激で E-cadherin の発現が 1/3 程度に減少しても依然として一定レベルの E-cadherin があり、形態変化を引き起こすまでには至らないのではないかと考えられた。

上記、D-4 株のサイトカイン刺激による EMT 誘導は in vivo における 2 相型の組織像の原因を考える上で重要な示唆を含むものと考えられる。実際、D-4 株の YAP 強制発現株をマウスの胸腔内に移植した際、上皮様組織を呈する部分と 2 相型の組織所見が認められているが (data not shown)、これは腫瘍組織内の部位により宿主の微小環境が異なることが大きな要因になっているのではないかと考えられた。例えば、腫瘍内に壊死が起こり、マクロファージが集積するような場所では炎症性サイトカインの濃度が局所的に高くなり、腫瘍内で EMT が誘導される可能性も考えられた。

このように正常中皮細胞が TGF- β などのサイトカイン濃度の変化により、EMT を起こしその性質を変えることを考慮すると、臨床例でも中皮腫では上皮型、2相型、肉腫型という組織型がひとつの腫瘍内に存在し、それらの間で移行が見られるが、中皮腫の Heterogeneity は腫瘍細胞の遺伝子レベルで

の変異の蓄積にもとづく polyclonality によ

をさらに発展させることが重要と考えられ

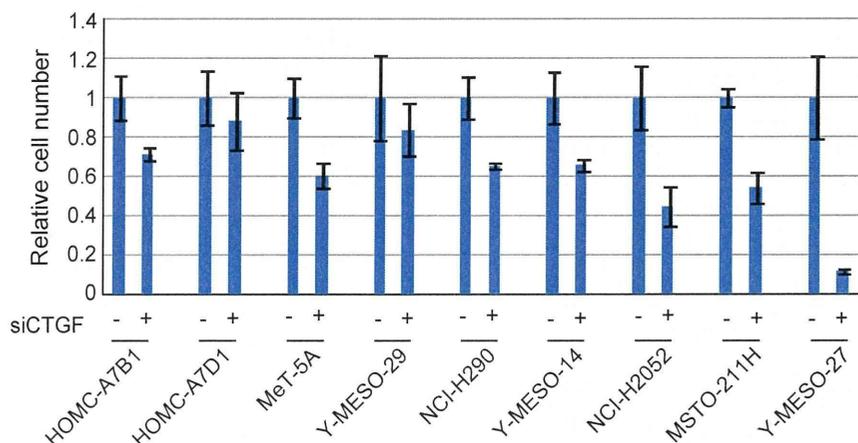


図4 不死化中皮細胞株および悪性中皮腫細胞株の CTGF ノックダウンによる細胞増殖に及ぼす影響

るといよりも、むしろサイトカインなどの微小環境の変化が起因している可能性が高いことが示唆された。今後さらに EMT を効果的に抑制し、治療に結びつけるためには、TGF- β /Hippo/CTGF 経路以外の TGF- β 下流シグナルとして既に知られている NF- κ B など を介した snail の発現上昇、E-cadherin の発現低下についても制御可能か否か詳細に検討し、中皮腫における EMT の分子機構の全貌を明らかにする必要があるものと考えられた。

E. 結論

正常の上皮型不死化中皮細胞パネルを確立し、それらを用いて TGF- β , IL1- β , TNF- α などの複数の炎症性サイトカインの協調作用により EMT が誘導されること、またこの EMT 誘導には TGF- β /CTGF 経路が関与し、この経路をブロックすることにより肉腫型への悪性進展を抑制できる可能性を明らかにした。今後、これらのモデルを組み合わせることにより、中皮腫の組織多様性や EMT のメカニズム解明、また中皮腫の各組織型に対する新しい治療法の開発に繋げるべくモデル

た。

F. 研究発表

1. 論文発表

1. Yusa A, Toneri M, Masuda T, Okochi M, Iwata H, Honda H, Arai F, Nakanishi H: Development of a New Rapid Isolation Device for Circulating Tumor Cells (CTCs) using 3D Palladium Filter and its Application for Genetic Analysis. PLoS ONE: 9, e8882, 2014.
2. Ito A, Ito Y, Matsushima S, Tsuchida D, Ogasawara M, Hasegawa J, Misawa K, Kondo E, Kaneda N, Nakanishi H: New whole-body multimodality imaging of gastric cancer peritoneal metastasis combining fluorescence imaging with ICG-labeled antibody and MRI in mice. Gastric Cancer, in press, 2014.
3. Oshima Y, Tanaka H, Murakami H, Ito Y, Furuya T, Kondo E, Kodera Y, Nakanishi H: Lapatinib sensitivity

of two novel trastuzumab-resistant HER2 gene-amplified gastric cancer cell lines. Gastric cancer, in press.

4. Yokobori T, Iinuma H, Shimamura T, Imoto S, Sugimachi K, Ishii H, Iwatsuki M, Ota D, Ohkuma M, Iwaya T, Nishida N, Kogo R, Sudo T, Tanaka F, Shibata K, Toh H, Sato T, Barnard GF, Fukagawa T, Yamamoto S, Nakanishi H, Sasaki S, Miyano S, Watanabe T, Kuwano H, Mimori K, Pantel K, Mori M: Plastin 3 Is a Novel Marker for Circulating Tumor Cells Undergoing the Epithelial-Mesenchymal Transition and Is Associated with Colorectal Cancer Prognosis. Cancer Res, 73; 2059-2069, 2013.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 発明名称：がん細胞自動分離装置およびがん細胞自動分離方法 特許出願番号：特願 2011-115083 出願人：名古屋大学、愛知県 発明者：新井 史人、益田 泰輔、新美 京（名古屋大学）：中西速夫（愛知県がんセンター） 出願日：平成 23 年 5 月 24 日
2. 発明名称：末梢循環腫瘍細胞又は希少細胞分離用デバイス。特願 2013-153717、 発明者：中西速夫、伊藤誠二（愛知県がんセンター）、発明者：絹田精鎮、市ノ瀬義行（㈱オプトニクス精密）、発明者：遊佐亜希子（公益財団法人科学技術交流財団）、発明者：本多裕之、大河内美奈（国立大学法人名古屋大学） 出願日；平成 25 年 7 月 23 日

厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）
分担研究報告書

悪性中皮腫の細胞周期・細胞極性の異常の解析と阻害薬の検討

研究分担者 稲垣昌樹 愛知県がんセンター研究所 発がん制御研究部 部長

研究要旨：本年度は、中皮腫特異的な傷害にも応用が期待し得る新規標的分子の同定を中心体 (centrosome) の機能に関わる蛋白質に注目して解析を進めた。これまでに研究分担者は、一次線毛形成が正常二倍体細胞の細胞増殖を休止させることをトリコプレイン蛋白質の機能解析から見出してきた。その応用として、Aurora-A 分裂期キナーゼ阻害では正常細胞は一次線毛を形成し細胞周期を休止させるが、一次線毛を形成しないとされるがん細胞は分裂障害により死滅すること、つまりがん細胞特異的な傷害効果のあることを見出した。また、正常中皮細胞にも一次線毛形成能があることを確認した。これらの結果を踏まえ、類似効果を示す標的分子をアミノ酸配列や siRNA 実験から探索し、さらに詳細な分子機能の解析をマーカー分子などで行った結果、Albatross が中心小体 (centriole) の付属物に局在するだけでなく中心体の正常な複製を保證することで、細胞周期進行に寄与することを見出した。また、トリコプレイン類縁蛋白質である Ndel1 にも正常二倍体細胞の一次線毛形成抑制機能があることを見出した。この独自の視点により、一次線毛形成や中心体複製制御に関わる複数の中心体蛋白質が、がん治療標的分子となる可能性を新たに見出した。

A. 研究目的

研究分担者はがん細胞に対する新たな治療戦略を開発する目的で、細胞の増殖・分化制御の本態を明らかにし、それらに関わる分子の阻害あるいは誘導実験による細胞増殖に対する効果を検討してきた。その一つとして、細胞の一次線毛形成が正常二倍体細胞の細胞増殖を休止させることをトリコプレイン蛋白質の機能解析を通じて発見し、その応用としてオーロラ A 分裂期キナーゼを阻害すると、正常細胞は一次線毛を形成し細胞周期を休止させるが、一次線毛を形

成しないとされるがん細胞は分裂障害により死滅する、つまりがん細胞特異的な傷害効果が生じることを見出してきた。昨年度、正常中皮細胞にも一次線毛形成能があることを確認し、この阻害効果が悪性中皮腫の傷害にも応用できる可能性を見出した。

本年度はこれらの結果を踏まえ、類似効果を示す新規標的分子の探索し、見出した新規分子に対し詳細な分子機能の解析を行い、その分子特性を明らかにすることを目的とした。

B. 研究方法

1. 類似機能蛋白質の検索

トリコプレイン類似配列を元に遺伝子を選出し、そのノックダウンによる機能的スクリーニングをRPE1細胞(hTERT不活化網膜色素上皮細胞、正常二倍体)で行うことにより、同様の蛋白質、すなわち増殖条件下でも一次線毛形成と細胞周期休止を導く蛋白質を含む中心体機能蛋白質を新たに10個ほど見出した。

2. 中心体での蛋白質局在解析

特異抗体を作成し、マーカー分子と共に組織染色、細胞染色を行い細胞内局在を高解像度顕微鏡により確認した。一次線毛形成は血清飢餓により誘導した。

3. 中心体機能の解析

RNA干渉法によるノックダウンをRPE1細胞に対して行い、各種遺伝子発現を減弱させた。その状態において免疫染色によりマーカー分子の変化を検討した。また、表現型の確認のために適宜遺伝子を再導入しレスキューを試みた。

4. 分子間結合実験

イーストハイブリッド法、免疫沈降法、リコンビナント精製蛋白質によるin vitro結合実験を適宜行った。

5. 変異体解析

分子内ドメイン解析のため、分子断片を蛋白質および発現ベクターとして作製し、上述の実験系で適宜使用した。

(倫理面への配慮)

遺伝子組み換え実験に関しては愛知県がんセンター遺伝子組み換え実験等安全委員会の承認を得て行った。

C. 研究結果

1. 新規中心体複製制御分子の同定

トリコプレインと類似配列を持つAlbatross蛋白質に注目した。その特異的抗体の局在からAlbatrossの詳細な中心体(centrosome)内の局在が母中心小体(mother centriole)の遠位端付属物に偏在することを明らかにした。また正常二倍体細胞を用いたAlbatross siRNAを用いたノックダウン実験では中心体複製が障害され、同時に細胞周期が休止した。これらの結果から、Albatrossが中心小体付属物に局在するだけでなく中心体の正常な複製を保証することで、細胞周期進行に寄与する全く新しいタイプの細胞周期制御因子である可能性が示唆された。

2. 新規一次線毛形成抑制分子の同定

トリコプレインと類似配列を持つNdel1に注目した。その特異抗体を用いた解析からNdel1の中心体における局在が母中心小体のsubdistal appendageに偏在することを明らかにした。正常二倍体細胞におけるNdel1 siRNAを用いたノックダウン実験では増殖条件下でも一次線毛が形成され、同時に細胞周期が休止した。この増殖休止は、一次線毛の除去により解除された。すなわち、一次線毛依存的な細胞周期の休止が起きたことが明らかとなった。このNdel1の特性はトリコプレイン・Aurora-Aの阻害効果と同様であるが、中心体内の局在や分子間結合様式が異なっていたため、新たな標的分子となりうる可能性が示唆された。

D. 考察

Albatrossによる中心体の複製制御を介した新たな細胞周期制御機構の解明は、中心体機能に着目したがん分子治療戦略を構

築する上で、新たな可能性を開くものと考えられた。また、Ndel1 の阻害結果からは一次線毛に注目した腫瘍増殖障害を新たな視点から導き得る可能性が考えられた。このように、がん細胞に一次線毛形成能が無い点や、細胞分裂・増殖における中心体の複製の重要性に着目することは、がん細胞に対する特異的な治療戦略を開発する上で、極めて高い独創性をもつものと考えられた。

E. 結論

中心体の複製機能に関わる分子および一次線毛形成との関わりの詳細の一端が明らかとなった。これらの分子の阻害による腫瘍特異的傷害効果を検討すると共に、一次線毛形成の誘導可能な正常中皮細胞、さらには悪性中皮腫細胞を用いた検討が、今後、中皮腫に対する新たな治療戦略を開発する上で、極めて重要であると思われた。

F. 研究発表

1. 論文発表

1. Odaka C, Loranger A, Takizawa K, Ouellet M, Tremblay MJ, Murata S, Inoko A, Inagaki M, Marceau N: Keratin 8 Is Required for the Maintenance of Architectural Structure in Thymus Epithelium. PLoS ONE 8: e75101, 2013.
2. Neise D, Sohn D, Stefanski A, Goto H, Inagaki M, Wesselborg S, Budach W, Stühler K, Jänicke RU. The p90 ribosomal S6 kinase (RSK) inhibitor BI-D1870 prevents gamma irradiation-induced apoptosis and mediates senescence via RSK- and p53-independent accumulation of

p21WAF1/CIP1. Cell Death and Dis, 4: e859, 2013.

3. Matsuyama M, Tanaka H, Inoko A, Goto H, Yonemura S, Kobori K, Hayashi Y, Kondo E, Itoharu S, Izawa I, Inagaki M: Defect of mitotic vimentin phosphorylation causes microphthalmia and cataract via aneuploidy and senescence in lens epithelial cells. J Biol Chem, 288: 35626-35635, 2013.
 4. Ikawa K, Satou A, Fukuhara M, Matsumura S, Sugiyama N, Goto H, Fukuda M, Inagaki M, Ishihama Y, Toyoshima F: Inhibition of endocytic vesicle fusion by Plk1-mediated phosphorylation of vimentin during mitosis. Cell Cycle, 131: 126-137, 2014.
 5. Kakeno M, Matsuzawa K, Matsui T, Akita H, Sugiyama I, Ishidate F, Nakano A, Takashima S, Goto H, Inagaki M, Kaibuchi K, Watanabe T: Plk1 phosphorylates CLIP-170 and regulates its binding to microtubules for chromosome alignment. Cell Struc Func, 39: 45-59, 2014.
 6. Goto H, Inagaki M: New Insights into Roles of Intermediate Filament (IF) Phosphorylation and Progeria Pathogenesis. IUBMB Life, in press.
2. 学会発表
 1. Goto H, Inagaki M: Screening of

- novel Aurora-A-associated proteins to prevent primary cilia assembly at the centrosome in proliferating cells. 第 65 回日本細胞生物学会大会, 2013, (名古屋) [シンポジウム]
2. Inoko A, Inagaki M: Translocation of keratin-binding proteins between the cell-cell adhesion and the centrosome as the functional switch of differentiation and proliferation. 第 65 回日本細胞生物学会大会, 2013, (名古屋) [シンポジウム]
 3. Kasahara K, Kawakami Y, Kawamura Y, Ibi M, Goshima N, Inagaki M: Emerging role of the ubiquitin-proteasome system in assembly of primary cilium. 第 65 回日本細胞生物学会大会, 2013, (名古屋) [ポスター]
 4. 田中宏樹, 猪子誠人, 松山誠, 井澤一郎, 稲垣昌樹: 細胞質分裂障害は染色体不安定性の亢進および細胞老化を誘導する. 第 65 回日本細胞生物学会大会, 2013, (名古屋) [シンポジウム]
 5. Li P, Goto H, Kasahara K, Inoko A, Izawa I, Mochizuki H, Togashi T, Kawamura Y, Kawakami Y, Goshima N, Kiyono K, Inagaki M: Screening of novel Aurora-A-associated proteins to prevent primary cilia assembly at the centrosome in proliferating cells. 第 65 回日本細胞生物学会大会, 2013, (名古屋) [ポスター]
 6. Goto H, Era S, Li P, Kasahara K, Inoko A, Ichiro I, Mochizuki H, Togashi T, Kawamura Y, Kawakami Y, Goshima N, Kiyono T, Inagaki M: Screening of novel Aurora-A-associated proteins. 第 72 回日本癌学会学術総会, 2013, (横浜) [ポスター]
 7. Kasahara K, Kawakami Y, Kawamura Y, Ibi M, Kiyono T, Goshima N, Matsuzaki F, Inagaki M: A Cul3-based ubiquitin E3 ligase controls primary cilia assembly through degradation of Trichoplein. 第 72 回日本癌学会学術総会, 2013, (横浜) [ポスター]
 8. 後藤英仁, 渡辺信元, 猪子誠人, 稲垣昌樹: がんの分子標的としての Aurora A キナーゼ. 第 87 回日本薬理学会年会, 2014, (仙台) [口演]
- G. 知的財産権の出願・登録状況
なし。

正常中皮細胞に対する遺伝子導入による悪性化の検討

研究分担者 瀬戸加大 愛知県がんセンター研究所 副所長兼遺伝子医療研究部部长

研究要旨:悪性中皮腫はHippoシグナル伝達系に関わる遺伝子が高頻度に不活性化し、その結果、YAP1転写コアクチベーターが恒常的に活性化している。しかし、これまでに見出された遺伝子異常が悪性中皮腫の発症にどのように関わっているのかについての実験的な証明は未だない。本研究は、これらの遺伝子を不死化正常中皮細胞へ導入し、増殖能の変化や造腫瘍能を検討することで、正常中皮細胞から悪性中皮腫へと形質転換する分子機構を明らかにすることを目的とした。昨年度、当研究グループが作成した、ヒトパピローマウイルス E6/E7-hTERT 導入により樹立した正常不死化中皮細胞株 3 株を用いて解析を行った。これらの細胞株に YAP1 遺伝子を導入したところ *in vitro* での増殖促進効果を認めた。さらにヌードマウスへ移植することにより *in vivo* においても腫瘍を形成できることを確認した。また、悪性中皮腫細胞株の発現解析で YAP1 の knockdown にて CCND1、FOXM1 などの発現低下が強く認められたため、YAP1 の代わりにこれらの細胞周期を促進する遺伝子の導入を行いその効果を検討した。さらに、不死化していない初代培養の中皮細胞に YAP1 遺伝子を単独で導入し不死化の誘導について検討した。これらの実験では各種の細胞周期関連遺伝子の導入では中皮細胞の腫瘍形成能には不十分であること、また YAP1 単独では初代培養中皮細胞を不死化できないことが明らかとなった。以上の結果より中皮細胞において E6/E7-hTERT と YAP1 の協調作用が中皮腫の腫瘍形成に重要であることが明らかとなった。今回の一連の実験は、正常中皮細胞に対して特定の遺伝子導入により悪性中皮腫モデルを作成できることを意味し、今後、治療開発研究の基盤的ツールとなるものと考えられた。

A. 研究目的

ヒトパピローマウイルス E6/E7-hTERT により不死化した正常中皮細胞株に悪性中皮腫関連がん遺伝子を導入し、増殖様式や形態変化を検討する。さらにマウスへの移植実験に

より造腫瘍性を検討する。これらの実験により悪性中皮腫の腫瘍化に関わる分子機構を解明するとともに、治療開発研究の基盤的ツールを作出することを目的とする。

B. 研究方法

当研究グループが作成した、ヒトパピローマウイルスE6/E7-hTERTによって不死化した正常中皮細胞株に悪性中皮腫関連がん遺伝子を導入し、増殖様式や形態変化を検討する。また、マウスでの造腫瘍性を検討する。

1. In vitro 増殖様式の検討方法

リン酸カルシウム法を用い 293T 細胞を標的として、関連がん遺伝子を組み込んだプラスミドを用いてウイルス産生（レトロウイルスベクター）させ、中皮細胞株へ感染させた。

導入遺伝子は、野生型 YAP1、活性型

YAP1 (S127A)、細胞周期関連遺伝子 (CCND1、SKP2、FOXM1、MYC)、RNA 干渉として NF2-shRNA、BAP1-shRNA であった。レポーター遺伝子として GFP、Kusabira Orange、hCD8 などを使用した。

細胞増殖の観察は 6 well 細胞培養プレートを用いた。4 日毎に継代し、継代時に FACS を行い GFP 陽性細胞の割合を 30 日間継時的に検討した。

2. ノードマウスへの移植方法

昨年度に引き続き、野生型 YAP1 もしくは活性型 YAP1 (S127A) を導入した不死化正常中皮細胞を $7.5 \times 10^6 \sim 1.0 \times 10^7$ 個/1 か所まで増やし、ノードマウスへ皮下移植した。対照群としてレポーター遺伝子である GFP のみ (Empty vector) を導入した不死化正常中皮細胞株を移植した。皮下移植の場合、1 匹につき Empty vector 導入正常中皮細胞を左背側の 2 か所に移植し、遺伝子導入正常中皮細胞を右背側の 2 か所に移植した (1 匹につき 4 か所移植)。

胸腔内移植の場合、1 匹につき 1 か所ずつ、それぞれのベクター導入正常中皮細胞を右側より胸腔内へ移植した。移植後 60 日目に解剖とした。

(倫理面への配慮)

本研究は愛知県がんセンターのヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理審査委員会の承認を得ている。動物実験は愛知県がんセンター動物委員会の許可を得た上で行った。

C. 研究結果

不死化正常中皮細胞株は上皮型 (HOMC-2 A-7 B-1) (以後 : B-1)、中間型 (HOMC-2 A-7 D-4) (以後 : D-4) と肉腫型 (HOMC-3 A-4) (以後 : A-4) を用いた (中西の項参照)。

1) 昨年度に続き、ノードマウスにおける造腫瘍能を検討した。遺伝子導入のない元の細胞株もしくはレポーター遺伝子 GFP のみ導入した細胞株ではノードマウスへの皮下接種にて腫瘍は作らなかったが活性型 YAP1 (S127A) を導入した上皮型、中間型ともに腫瘍を形成した (図 1)。

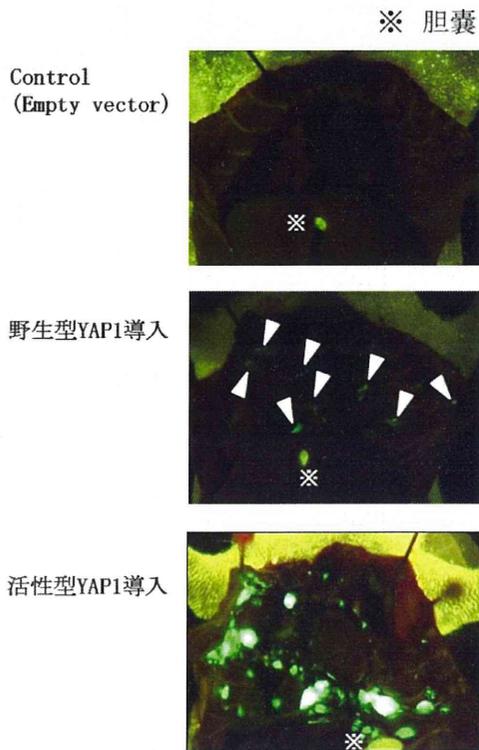


図1 中皮細胞株の胸腔内移植像

表1

A. 皮下移植における腫瘍形成率

	上皮型	中間型	肉腫型
Control	0/8 (0.0%)	0/8 (0.0%)	0/8 (0.0%)
野生型YAP1	5/8 (62.5%)	8/8 (100%)	4/8 (50%)
活性型YAP1	4/8 (50.0%)	6/8 (75%)	6/8 (75%)

B. 胸腔内移植における腫瘍形成率

	上皮型	中間型	肉腫型
Control	1/2 (50%)	0/2 (0.0%)	0/2 (0.0%)
野生型YAP1	2/2 (100%)	2/2 (100%)	2/2 (100%)
活性型YAP1	2/2 (100%)	2/2 (100%)	2/2 (100%)

2) 中皮腫細胞株では YAP1 の knock down にて CCND1 などの発現低下が強く認められたため、細胞周期を促進する他の 4 遺伝子 (CCND1、SKP2、FOXM1、MYC) を導入することにより、それらの増殖促進効果の有無を検討した。その結果、MYC を除く 3 遺伝子では in vitro での増殖能の亢進を認めなかった (図 2)。しかし、MYC 導入に

よってもヌードマウスへの皮下移植による in vivo での造腫瘍能は認めなかった。

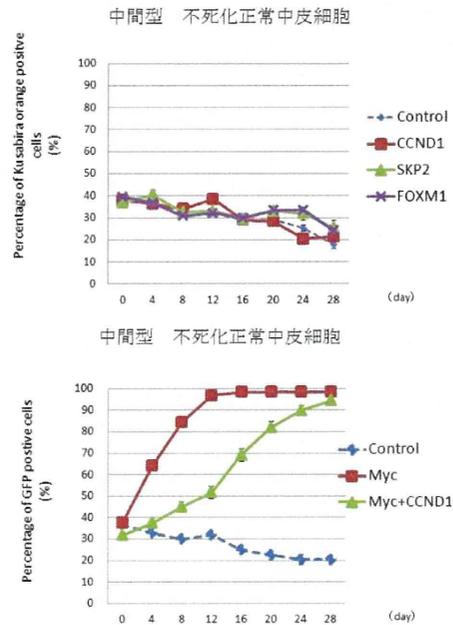


図2 中間型細胞株 D-4 の増殖能の変化

YAP1 単独にて不死化・腫瘍化が可能かを検討するため、不死化していない初代培養中皮細胞へ YAP1 遺伝子を導入した。しかし、YAP1 導入株は野生型および活性型ともに Control と同様に継代後、細胞増殖の停止を認めた (図 3)。

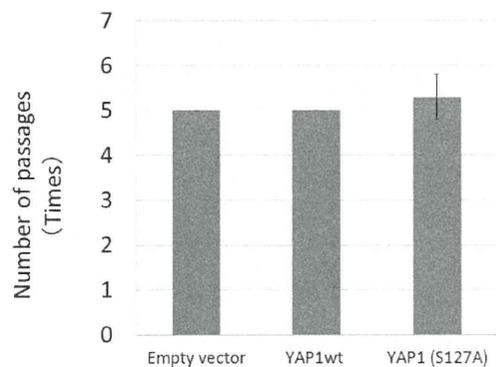


図3 中皮初代培養細胞への遺伝子導入後の継代回数

3) 中皮腫では NF2 や BAP1 遺伝子の高頻度の不活性化変異が報告されている。RNA 干渉

を用いて2つの遺伝子発現を knock down することにより、増殖能に及ぼす影響を検討した。その結果、NF2-shRNA では増殖能の促進を認めたが、BAP1-shRNA では増殖能の低下を認めた(図4)。

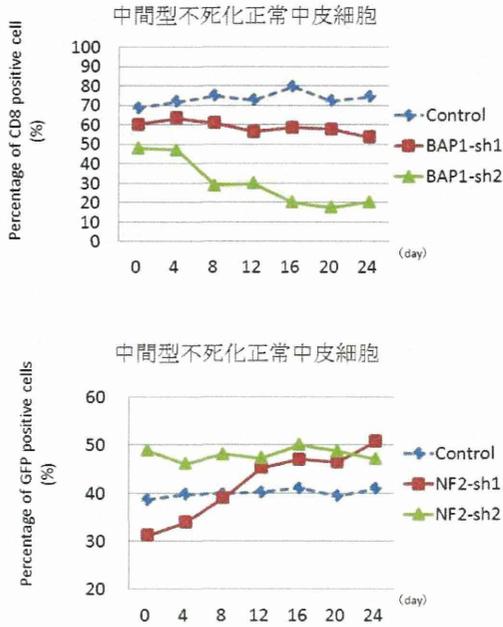


図4 BAP1、NF2 ノックダウンによる細胞増殖能の変化

さらに in vivo 移植実験では、NF2-shRNA を導入した中間型不死化中皮細胞株 D-4 で腫瘍形成を認めた(図5)。

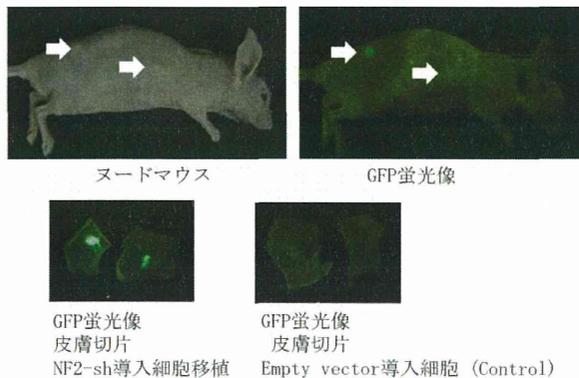


図5 中間型細胞株へのNF2-shRNA 導入

4) BAP1-shRNA 導入での不死化中皮細胞の増

殖能の低下は、BAP1 の腫瘍抑制遺伝子として予想される機能と相反するため、YAP1 との協調にて効果が変化するのではないかと予想し、YAP1 を同時に導入して検討を行った。しかし BAP1-shRNA の導入は YAP1 導入による増殖能の亢進を減弱させることが明らかとなった(図6)。

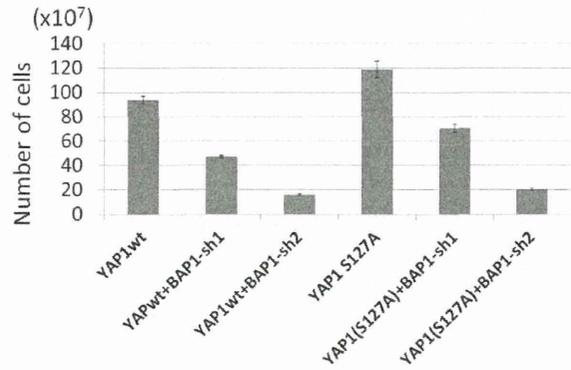


図6 中間型中皮腫細胞株の細胞数 (Day 19)

D. 考察

- 1) 悪性中皮腫細胞株に細胞周期を促進する遺伝子 (CCND1、FOXM1 など) を YAP1 に代わり導入することで造腫瘍能を検討したが、それらの遺伝子導入では細胞増殖能の亢進や造腫瘍能を誘導できなかった。細胞周期関連遺伝子の発現制御を司るマスター遺伝子である YAP1 の恒常的活性化が中皮細胞増殖や造腫瘍能にとって極めて重要であることが明らかとなった。
- 2) 不死化していない初代培養中皮細胞へ YAP1 遺伝子単独導入にて不死化できるか否かを検討したが、Control と同様に細胞の増殖能の停止を認めた。YAP1 単独では中皮細胞の不死化に不十分であることが明らかとなった。

3) BAP1 は中皮腫の新規がん抑制遺伝子として同定されたが、その増殖能に対する効果は議論が分かれている。不死化中皮細胞株における BAP1 ノックダウン等の検討により、本実験モデル系においては中皮細胞において BAP1 遺伝子の存在がむしろ増殖維持に機能していることが示唆された。

E. 結論

1. E6/E7-hTERT を用いて不死化した正常中皮細胞に対して造腫瘍能を付与するには細胞周期を促進する遺伝子の単独導入では十分ではなく、YAP1 の恒常的活性化が必須であることが明らかとなった。
2. 悪性中皮腫における代表的ながん抑制遺伝子である BAP1 は、肉腫型正常中皮細胞において増殖能への関連は乏しいが、中間型正常中皮細胞では逆に増殖能の維持に寄与していることが示唆された。

F. 研究発表

1. 論文発表

1. Umino A, Seto M: Array CGH Reveals Clonal Evolution of Adult T-Cell Leukemia/Lymphoma. *Methods Mol Biol.* 973: 189-96. 2013.
2. Teshima K, Nara M, Watanabe A, Ito M, Ikeda S, Hatano Y, Ohshima K, Seto M, Sawada K, Tagawa H: Dysregulation of BMI1 and microRNA-16 collaborate to enhance an anti-apoptotic potential in the side population of refractory mantle cell lymphoma. *Oncogene*, 33:

2191-203, 2014.

3. Arita K, Maeda-Kasugai Y, Ohshima K, Tsuzuki S, Suguro-Katayama M, Karube K, Yoshida N, Sugiyama T, Seto M: Generation of mouse models of lymphoid neoplasm using retroviral gene transduction of in vitro-induced germinal center B and T cells. *Exp Hematol.* 41:731-41.e9. 2013.
4. Yamamoto K, Tsuzuki S, Minami Y, Yamamoto Y, Abe A, Ohshima K, Seto M, Naoe T: Functionally Deregulated AML1/RUNX1 Cooperates with BCR-ABL to Induce a Blastic Phase-Like Phenotype of Chronic Myelogenous Leukemia in Mice. *Plos One.* 8:e74864. 2013.
5. Yoshida N, Oda M, Kuroda Y, Katayama Y, Okikawa Y, Masunari T, Fujiwara M, Nishisaka T, Sasaki N, Sadahira Y, Mihara K, Asaoku H, Matsui H, Seto M, Kimura A, Arihiro K, Sakai A: Clinical Significance of sIL-2R Levels in B-Cell Lymphomas. *PLoS One*:8:e78730 2013.
6. Kimura H, Karube K, Ito Y, Hirano K, Suzuki M, Iwata S, Seto M: Rare occurrence of JAK3 mutations in natural killer cell neoplasms in Japan. *Leuk Lymphoma*, 55: 962-3, 2014.
7. Guo Y, Takeuchi I, Karnan S, Miyata T, Ohshima K, Seto M: Array CGH profiling of immunohistochemical subgroups of diffuse large B-cell lymphoma shows distinct genomic alteration. *Cancer*

Science in press.

8. Kato H, Karube K, Yamamoto K, Takizawa J, Tsuzuki S, Yatabe Y, Kanda T, Katayama M, Ozawa Y, Ishitsuka K, Okamoto M, Kinoshita T, Ohshima K, Nakamura S, Morishima Y, Seto M: Gene expression profiling of Epstein-Barr virus positive diffuse large B-cell lymphoma of the elderly reveals alterations of characteristic oncogenetic pathways. *Cancer Science*, 105: 537-44, 2014.
9. Chihara D, Kagami Y, Kato H, Yoshida N, Kiyono T, Kinoshita T, Seto M: IL2/IL-4, OX40L and FDC-like cell line support the in vitro tumor cell growth of Adult T-cell leukemia/lymphoma. *Leukemia Res*, 38: 608-12, 2014.
2. 学会発表
 1. 吉田稚明, 加留部謙之輔, 宇都宮與, 塚崎邦弘, 今泉芳孝, 平良直也, 鶴池直邦, 海野啓, 在田幸太郎, 片山幸, 都築忍, 大島孝一, 瀬戸加大: Cell cycle 関連遺伝子の異常は慢性型 ATLL の急性転化に関与する. 第 53 回日本リンパ網内系学会総会, 2013, (京都) [口演]
 2. Seto M: MEET THE PROFESSOR SESSIONS·XV. MALIGNANT LYMPHOMA AS A CONSEQUENCE OF CLONAL EVOLUTION. 第 12 回国際悪性リンパ学会議, 2013, (Switzerland) [口演]
 3. 都築 忍, 瀬戸加大: インビトロで誘導した T 細胞への遺伝子導入によるマウスリンパ腫モデル. 第 72 回日本癌学会学術総会. 2013, (横浜) (示説)
 4. 勝呂 幸, 田川博之, 竹内一郎, 吉田 稚明, 在田幸太郎, 都築 忍, 瀬戸 加大: リンパ腫を形成するクローン細胞の多様性は、臨床病態を反映する. 第 72 回日本癌学会学術総会, 2013, (横浜) (示説)
 5. 吉田稚明, 加留部謙之輔, 宇都宮與, 塚崎邦弘, 今泉芳孝, 平良直也, 鶴池直邦, 海野啓, 在田幸太郎, 片山幸, 都築忍, 大島孝一, 瀬戸加大: Cell cycle-related gene alterations are involved in transformation of chronic ATL. 第 72 回日本癌学会学術総会. 2013, (横浜) [口演]
 6. Arita K, Tsuzuki S, Ohshima K, Sugiyama T, Seto M: New mouse model of B-cell lymphoma using retrovirally transduced normal mature B-cells. 第 72 回日本癌学会学術総会. 2013, (横浜) [口演]
 7. 瀬戸加大: 悪性リンパ腫発症の分子機構. 第 72 回日本癌学会学術総会. 2013, (横浜) [口演]
 8. 都築 忍, 瀬戸加大: TEL (ETV6)-AML1 (RUNX1) Initiates Self-renewing Fetal Pro-B Cells in mice. 第 75 回日本血液学会学術集会. 2013, (札幌) (示説)
 9. 吉田稚明, 加留部謙之輔, 宇都宮與, 塚崎邦弘, 今泉芳孝, 平良直也, 鶴池直邦, 海野啓, 在田幸太郎, 片山幸, 都築忍, 大島孝一, 瀬戸加大: Cell cycle-related gene alterations are involved

in transformation of chronic ATL. 第
75 回日本血液学会学術集会. 2013, (札
幌) [口演]

10. Arita K, Tsuzuki S, Ohshima K,
Sugiyama T, Seto M: New mouse B-cell
lymphoma model originated from
germinal center. 第 75 回日本血液学会
学術集会. 2013, (札幌) [口演]

G. 知的財産権の出願・登録状況
なし。

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表氏名	巻号	ページ	出版年
Sekido Y.	Molecular pathogenesis of malignant mesothelioma.	Carcinogenesis	34	1413-9	2013
Satoh M, Takemura Y, Hamada H, Sekido Y, Kubota S.	EGCG induces human mesothelioma cell death by inducing reactive oxygen species and autophagy.	Cancer Cell Int	13	19	2013
Abe S, Morita Y, Kato-Kaneko M, Hanibuchi M, Tsujimoto Y, Goto H, Kakiuchi S, Aono Y, Huang J, Sato S, Kishuku M, Taniguchi Y, Azuma M, Kawazoe K, Sekido Y, Yano S, Akiyama S, Sone S, Minakuchi K, Kato Y, Nishioka Y.	A novel targeting therapy of malignant mesothelioma using anti-podoplanin antibody.	J Immunol	190	6239-40	2013
Chew S-H, Okazaki Y, Nagai H, Misawa N, Akatsuka S, Yamashita K, Jiang L, Yamashita Y, Noguchi M, Hosoda K, Sekido Y, Takahashi T, Toyokuni S.	Cancer-promoting role of adipocytes in asbestos-induced mesothelial carcinogenesis through dysregulated adipocytokine production.	Carcinogenesis	35	164-72	2014
Tanaka I, Osada H, Fujii M, Fukatsu A, Hida T, Horio Y, Kondo Y, Sato A, Hasegawa Y, Tsujimura T, Sekido Y.	LIM-domain protein AJUBA suppresses malignant mesothelioma cell proliferation via Hippo signaling cascade.	Oncogene	in press		
Yusa A, Toneri M, Masuda T, Okochi M, Iwata H, Honda H, Arai F, Nakanishi H.	Development of a New Rapid Isolation Device for Circulating Tumor Cells (CTCs) using 3D Palladium Filter and its Application for Genetic Analysis.	PLoS ONE	9	e8882	2014
Ito A, Ito Y, Matsushima S, Tsuchida D, Ogasawara M, Hasegawa J, Misawa K, Kondo E, Kaneda N, Nakanishi H.	New whole-body multimodality imaging of gastric cancer peritoneal metastasis combining fluorescence imaging with ICG-labeled antibody and MRI in mice.	Gastric Cancer	in press		
Oshima Y, Tanaka H, Murakami H, Ito Y, Furuya T, Kondo E, Kodera Y, Nakanishi H.	Lapatinib sensitivity of two novel trastuzumab-resistant HER2 gene-amplified gastric cancer cell lines.	Gastric cancer	in press		

Yokobori T, Iinuma H, Shimamura T, Imoto S, Sugimachi K, Ishii H, Iwatsuki M, Ota D, Ohkuma M, Iwaya T, Nishida N, Kogo R, Sudo T, Tanaka F, Shibata K, Toh H, Sato T, Barnard GF, Fukagawa T, Yamamoto S, <u>Nakanishi H</u> , Sasaki S, Miyano S, Watanabe T, Kuwano H, Mimori K, Pantel K, Mori M.	Plastin 3 Is a Novel Marker for Circulating Tumor Cells Undergoing the Epithelial-Mesenchymal Transition and Is Associated with Colorectal Cancer Prognosis.	Cancer Res	73	2059-69	2013
Odaka C, Loranger A, Takizawa K, Ouellet M, Tremblay MJ, Murata S, Inoko A, <u>Inagaki M</u> , Marceau N.	Keratin 8 Is Required for the Maintenance of Architectural Structure in Thymus Epithelium.	PLoS ONE	8	e75101	2013
Neise D, Sohn D, Stefanski A, Goto H, <u>Inagaki M</u> , Wesselborg S, Budach W, Stühler K, Jänicke RU.	The p90 ribosomal S6 kinase (RSK) inhibitor BI-D1870 prevents gamma irradiation-induced apoptosis and mediates senescence via RSK- and p53-independent accumulation of p21WAF1/CIP1.	Cell Death and Dis	4	e859	2013
Matsuyama M, Tanaka H, Inoko A, Goto H, Yonemura S, Kobori K, Hayashi Y, Kondo E, Itohara S, Izawa I, <u>Inagaki M</u> .	Defect of mitotic vimentin phosphorylation causes microphthalmia and cataract via aneuploidy and senescence in lens epithelial cells.	J Biol Chem	288	35626-35	2013
Ikawa K, Satou A, Fukuhara M, Matsumura S, Sugiyama N, Goto H, Fukuda M, <u>Inagaki M</u> , Ishihama Y, Toyoshima F.	Inhibition of endocytic vesicle fusion by Plk1-mediated phosphorylation of vimentin during mitosis.	Cell Cycle	131	126-37	2014
Kakeno M, Matsuzawa K, Matsui T, Akita H, Sugiyama I, Ishidate F, Nakano A, Takashima S, Goto H, <u>Inagaki M</u> , Kaibuchi K, Watanabe T.	Plk1 phosphorylates CLIP-170 and regulates its binding to microtubules for chromosome alignment.	Cell Struc Func	39	45-59	2014
Goto H, <u>Inagaki M</u> .	New Insights into Roles of Intermediate Filament (IF) Phosphorylation and Progeria Pathogenesis.	IUBMB Life	in press		
Umino A, <u>Seto M</u> .	Array CGH Reveals Clonal Evolution of Adult T-Cell Leukemia/Lymphoma.	Methods Mol Biol	973	189-96	2013

Teshima K, Nara M, Watanabe A, Ito M, Ikeda S, Hatano Y, Oshima K, <u>Seto M</u> , Sawada K, Tagawa H.	Dysregulation of BMI1 and microRNA-16 collaborate to enhance an anti-apoptotic potential in the side population of refractory mantle cell lymphoma.	Oncogene	33	2191-203	2014
Arita K, Maeda-Kasugai Y, Ohshima K, Tsuzuki S, Suguro-Katayama M, Karube K, Yoshida N, Sugiyama T, <u>Seto M</u> .	Generation of mouse models of lymphoid neoplasm using retroviral gene transduction of in vitro-induced germinal center B and T cells.	Exp Hematol	41	731-41, e9	2013
Yamamoto K, Tsuzuki S, Minami Y, Yamamoto Y, Abe A, Ohshima K, <u>Seto M</u> , Naoe T.	Functionally Deregulated AML1/RUNX1 Cooperates with BCR-ABL to Induce a Blastic Phase-Like Phenotype of Chronic Myelogenous Leukemia in Mice.	Plos One	8	e74864	2013
Yoshida N, Oda M, Kuroda Y, Katayama Y, Okikawa Y, Masunari T, Fujiwara M, Nishisaka T, Sasaki N, Sadahira Y, Mihara K, Asaoku H, Matsui H, <u>Seto M</u> , Kimura A, Arihiro K, Sakai A.	Clinical Significance of sIL-2R Levels in B-Cell Lymphomas.	PLoS One	8	e78730	2013
Kimura H, Karube K, Ito Y, Hirano K, Suzuki M, Iwata S, <u>Seto M</u> .	Rare occurrence of JAK3 mutations in natural killer cell neoplasms in Japan.	Leuk Lymphoma	55	962-3	2014
Guo Y, Takeuchi I, Karnan S, Miyata T, Ohshima K, <u>Seto M</u> .	Array CGH profiling of immunohistochemical subgroups of diffuse large B-cell lymphoma shows distinct genomic alteration.	Cancer Science	in press		
Kato H, Karube K, Yamamoto K, Takizawa J, Tsuzuki S, Yatabe Y, Kanda T, Katayama M, Ozawa Y, Ishitsuka K, Okamoto M, Kinoshita T, Ohshima K, Nakamura S, Morishima Y, <u>Seto M</u> .	Gene expression profiling of Epstein-Barr virus positive diffuse large B-cell lymphoma of the elderly reveals alterations of characteristic oncogenetic pathways.	Cancer Science	105	537-44	2014
Chihara D, Kagami Y, Kato H, Yoshida N, Kiyono T, Kinoshita T, <u>Seto M</u> .	IL2/IL-4, OX40L and FDC-like cell line support the in vitro tumor cell growth of Adult T-cell leukemia/lymphoma.	Leukemia Res	38	608-12	2014